



TITLE:

研究開発コロキウム: 精神分析理論  
から見た「発達障害」というカテ  
ゴリーについて -主にLacan派の視  
点から-

AUTHOR(S):

河野, 一紀

---

CITATION:

河野, 一紀. 研究開発コロキウム: 精神分析理論から見た「発達障害」というカテゴリー  
について -主にLacan派の視点から-. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざ  
して 2011, 中間報告書(2010年度): 24-24

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179637>

RIGHT:

## 精神分析理論から見た「発達障害」というカテゴリーについて —主にLacan派の視点から—

### 〔研究目的〕

「発達障害」という診断カテゴリーは、今日では心理臨床においても社会一般にも取りざたされることが増えつつあり、その認知や理解は進みつつある。しかし、「発達障害」は従来、器質的な原因によるもの、とりわけ「脳の障害」として考えられてきており、それを認めたくえでの適応や療育といった視点が研究や実践の中で大きな割合を占めているという現状を鑑みるに、「発達障害」というカテゴリーが心理臨床の立場からの見立てや診断の基準に十分になりえていない。また、最近では心理療法的なアプローチについての研究も徐々になされつつあるが、「発達障害」と診断された人々についての現象的な記述に焦点を当てて論じるにとどまっていることが多く、その心理的な在り方、すなわち力動的なこころの在り方が問題にされることは少ない。

しかし、従来の精神分析理論が示しているように、臨床において観察される様々な現象は、それを生じさせるメタサイコロジー的な構造によって大きく異なり、この次元を抜きには、心理療法の方針を決定する見立てやそれを支える心理的力動的な理解を構築していくことはできない。そこで、本研究では、「発達障害」というカテゴリーについて、精神分析的視点、とりわけLacan派の視点を参照しつつ、主体の構造や心的世界の在り方といったメタサイコロジー的な次元に焦点を当て、心理療法の固有の立場から「発達障害」について再考し、その概念を整理し理解を深め、その心理療法の可能性を探ることを目指した。

### 〔研究経過〕

本研究ではまず、「発達障害」に対する従来のアプローチ、すなわち、自閉症をその中核的な問題と考える視点からの検討をおこなった。まず、自閉症の主体を、こどもが象徴的なものへ参入し、欲望し言語を話す主体として構造化されていくプロセスとしてLacan, J.が再概念化したエディプス・コンプレックスにおいて理解することを試みた。主体における象徴的秩序の機能という観点からは、神経症ではなく精神病との構造的近似性を自閉症には見出すことができた。だが、エディプス・コンプレックス以前の原初的象徴秩序の次元を考慮に入れるならば、自閉症者は他者の欲望に直面することにおける困難を抱えており、精神病患者よりも象徴的構造化が機能していない状態にあるために、あらゆる他者の介入が侵襲的なものとして体験される。自閉症者に見出される発話の困難や視線の合わなさ、他者の欲望に対する主体の反応のあらわれとして理解される。このように、自閉症者においては、主体や他者の生成そのものの可能性の次元に生じる困難、すなわち従来の心理療法の前提そのものを問い直すような

困難が生じているということが明らかとなった。

一方で、現在問題となっている「発達障害」のカテゴリーには、神経症や精神病と見立てられるべき主体や、あるいは軽度の発達障害、ベースに発達障害が想定されるものの様々な症状をまとった「重ね着症候群」など、上述したような自閉症の主体の在り方によって全て説明することができるのか検討を要する事例も含まれている。そこで本研究では、自閉症を「発達障害」の中核に想定する従来のアプローチに代えて、ポスト神経症の時代である現代における新たな主体の在り方として「倒錯」を取り上げ、その構造や心的経済に対する考察を深めることからアプローチを試みた。

Lebrun, J.-P.は「ふつうの倒錯」という概念を提唱して、象徴的なものの衰退、象徴的不安定に特徴づけられる現代においては、主体の構造化における中心的な機制は抑圧ではなく、Freudが倒錯に特有の機制として定式化した否認（Verleugnung）であると主張している。この否認とは、主体が享楽を諦めて欲望の主体として自らを設立するために引き受けなければならない欠如や否定性に対する否認であり、主体による欠如の受け入れの否認は、とりもなおさず、社会において欠如や否定性を伝達してきた例外という位置、すなわち象徴的なものや他者（Autre）が現代において衰退しつつあるという事態と軌を一にしている。そして、このような心的経済をもった主体には、分析治療や心理療法の基盤となる転移が神経症者のように自明には成立せず、その治療の目的も抑圧の解除ではなく、この否認を諦めさせること、すなわち去勢にかかわってくる。本研究では、現在は「発達障害」とカテゴライズされる人々の在り方を、このような「倒錯」という主体の在り方から考察し、その心理療法的なアプローチについて検討した。

### 〔研究成果〕

本研究では、主体の生成という観点から「発達障害」とカテゴライズされる人々の在り方を検討することによって、自閉症研究を中心に据えた従来のアプローチに代わる観点、すなわち「倒錯」という主体の在り方から、「発達障害」に対して新たな理解をもたらすことができた。また、これは転移や他者、去勢といった精神分析に固有の概念であり、心理臨床にとっても基本である概念を再考することにつながると考えられた。

本研究の一部は第29回日本心理臨床学会秋季大会において発表された。

（文責：河野 一紀）